

## 『哲学の探求』第37号刊行にあたって

『哲学への探求』第37号をお送りする。本号は、2009年度の「哲学若手研究者フォーラム（略して「若手フォーラム」、旧名称は全国若手哲学者研究ゼミナール）」の記録である。

本フォーラムをご存じない方のためにあらかじめ説明をしておこう。「若手フォーラム」とは、大学院生・学部生・オーバードクターらを中心に、毎年開催されている哲学研究集会である。宿泊施設付きの会場で一泊二日の日程で開催される本フォーラムには、大学・専門・身分の枠を超えて、毎年、全国各地から哲学に関心のある若者が100人近く参加している。

フォーラムのメインイベントは、大学教員の方を招いてひとつのテーマに沿って行われる「テーマレクチャー」と、応募者による「個人研究発表」である。とりわけ本フォーラムの特徴としては、他の学会と比べ質疑応答の時間がとても長いという点があげられるだろう。多くの参加者を交えた長時間のディスカッションは、毎年、若き哲学者たちにとって実り多い研鑽の舞台となっている。さらに発表後も、夜の懇親会、二次会、そして宿舎で、と（睡眠時間を削りながらも！）哲学談義はつづけられる——ときに談笑を、そしてときに、独特な主張と粘り強い反論を巻き起こしながら。これらの「裏イベント」から貴重な発想を獲得した哲学徒も、そう少なくはないはずだ。単に「投げっぱなし」の発表をするのではなく、皆で思考を練り上げること。そこにこそ、「若手フォーラム」の精神はある。

今号掲載の論文はすべて、昨年2009年7月18、19日に開催された同フォーラムにおけるテーマレクチャーおよび個人研究発表を基にしたものである。

2009年のフォーラムでは「分析美学の現在」と題されたテーマレクチャーが行われ、清塚邦彦（山形大学）、西村清和（東京大学）、三浦俊彦（和洋女子大学）の各氏に講演をいただいた。「美学」という、本フォーラムにはあまり馴染みのなかったテーマで組まれた挑戦的企画であったが、三氏による最先端の研究紹介と、それぞれの個性が十分に発揮されたディスカッションもあって、熱気にあふれた、たいへん有意義な時間を過ごすことができた。幸いにも今号に

は、そのすべてのレクチャーから論文を寄稿していただいている。レクチャーを聞くことができなかつた方も、各論文からその熱い雰囲気を感じとってほしい。

他にも、今号には、個人研究枠での口頭発表をもとにした論文が5本掲載されている。長時間の討論で練り上げられた論文は、どれも読み応えのある素晴らしいものになっている。ご自身の関心から外れる論文にも、ぜひ目を通してみていただきたい。

次回、2010年度のフォーラムは、7月17,18日(土,日)の二日間で、例年同様、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)にて開催される。テーマレクチャーのタイトルは「知覚の哲学」。河野哲也(立教大学)、篠原成彦(信州大学)、村田純一(東京大学)の三氏にご講演をいただく予定となっている(その講演要旨はすでに今号155~160ページおよび、ホームページ<http://www.wakate-forum.org/>に掲載されている)。

もちろん、個人研究発表枠も十分な数が確保されている。最新の研究成果をお持ちの方、論文作成前に多くの人から意見をもらいたい方、萌芽的な思考を練り上げたい方、さまざまな方の発表をお待ちしている。参加、発表にあたって必要な資格は一切存在しない。学部生でも社会人でも、興味がある方は、ささやかな積極性とあふれる哲学的探求心、そして心の「若さ」(プラスそれにくらべればほんの少しの参加費)を用意して、ぜひ参加していただきたい(次回フォーラムの詳細は本号153~154ページに掲載)。

若者は、ただ出会うだけではならない。主張と批判と、信頼と敬意を! 歴史的傑作の多くは、気力に富んだ若者たちの衝突と研鑽のなかで生み出されるのだ。われわれは、哲学において討議することの意義を信じている。探求心と向上心をいまだ若々しく保つ人々よ。哲学界の「トキワ荘(もしくは大泉サロン)」へようこそ!

2009年度・世話人総務担当  
森 功次